

***金子天文台の機材を国立天文台に譲渡—その3— :**

「シュミット望遠鏡フィルム現像タンク」

アーカイブ室新聞第705号(2013年12月31日)に、「射場天体観測所の3.5吋 Dallmeyer Astrographの所在が判明」、アーカイブ室新聞第722号(2014年3月18日)に、「「ダルメイヤー天体写真儀」収蔵」という記事を書いた。これは戦前神戸にあった射場観測所の機材が1946年に東京天文台に譲渡された件について調査していた時の記事である。これを機に金子天文台とかかわりを持ち、アーカイブ新聞第740号(2014年7月14日)に、「金子天文台の機材を国立天文台に譲渡—その1—」、アーカイブ新聞第741号(2014年7月23日)に、「金子天文台の機材を国立天文台に譲渡—その2—」、アーカイブ新聞第746号(2014年9月10日)に、「山村文化研究所(金子天文台)の山村通信を収蔵」という金子天文台に関する5本の記事を書いた。これらは愛知県東栄町にあった金子天文台が廃止されるにあたって、所有されていた機材を国立天文台に譲って頂いたことについて書いた。

今回はその続編である。金子天文台から譲渡されたもののリストを作成した際、このリストに載らなかったものが何点かあり、そのうち興味深いものについて記録しておきたい。

これは金子天文台で使われていたシュミット望遠鏡で撮影されたフィルムの現像タンク(写真1)である。金子天文台の望遠鏡は主催されていた金子 功氏の創意工夫が随所にみられるユニークなものであった。今回の現像タンクも氏の創意工夫があふれているように思える。写真2は現像液の注ぎ口の蓋を外したところである。



写真1 現像タンク



写真2 注ぎ口の蓋を外したところ

ここまではただのタンクである。写真3がタンクのふたを外したところである。タンクの中に4本の柱があり、4本の柱の中にフィルムの仕切り盤と思われるものがある。4本の柱ごと取り出したものが写真4である。写真4で見るとようにフィルムの仕切り盤は2種類あり、その間にステンレス製の四角な板がある。写真5が2種類のフィルム仕切り盤と思

われるものである。



写真3 タンクのふたを外したところ



写真4



写真5 2種類のフィルム仕切り盤

フィルムの仕切り盤の左のものはリング状をしており、フィルムに間隔をもたせるためにのこぎり刃状に凸凹している。一方、右の仕切り盤は円盤状をしており、周囲の部分の凸凹が付けてある。写真6、7は凸凹の様子、リング状、円盤状がよくわかるようにした写真である。



写真6 リング状の仕切り盤



写真7 円盤状の仕切り盤

写真乾板、写真フィルム時代に観測していた筆者には、この違いがよく理解できる。写

真 6 のリング状のものでは凸凹の間隔が狭く現像液がフィルム面をスムーズの流れないことが起きて現像ムラを作ったと思われる。またタンクを上下左右に振った場合、上下のフィルム面が接触し、さらに現像ムラを作る可能性がある。写真 7 の円盤状にし、凸凹を大きくしたことで、現像液の流れが容易になると同時に、フィルムが接触する心配がなくなっている。このように工夫を重ねたことがうかがわれる現像タンクである。現像が終わったら、現像液を出し、定着液を注ぐのである。このフィルム仕切り盤で撮影済みのフィルムを何枚も重ね同時にたくさんのフィルムが現像されたことであろう。

これらフィルムを仕切り盤と交互に挟み込んでいく作業は当然のことながら暗室作業である。そのためフィルムの中に必ず円盤の仕切り盤が入っていることが作業を容易にしたと思われる。金子氏の創意工夫の一端を見た思いである。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp